

主 題：生ける救いの神への賛歌

聖書箇所：詩篇 18 篇

テーマ：もし、自分の死が間近に迫っていると知り、最後に何かことばを残すとしたら、
どんなことばを残すだろうか？

今朝、皆さんとともに学ぶことばは詩篇 18 篇です。聖書をお持ちの方はどうぞお開きください。これまで私たちは詩篇 1 篇から始めて一つ一つ順番に見てきましたが、今回の 18 篇はどうやってメッセージしようかと、これまでの比にならないほど悩みました。なぜならこの詩篇 18 篇は全部で 50 節あり詩篇全体の中でも 4 番目に長いものです。どうしたものかと考えましたが、学べば学ぶほどこの詩篇全体を通して見ることのできるすばらしい教えがより鮮明に見えてきました。ですから、きょうは 50 節すべてを 1 回で学んでみたいと思います。

学びを始める前に、まず皆さん、次の質問をよく考えてみてください。

「もし、自分の死が間近に迫っていると知り、最後に何かことばを残すとしたら、どんなことばを残すでしょうか？」自分の最後がすぐそこに迫っているとすれば、どんなことに思いを巡らせ、どんなことばを私たちは口にするのでしょうか？“最後のことば”は多くの場合、大切なことを私たちに教えてくれます。特に、かつての信仰者たちが残した“最後のことば”を見れば、私たちはそこに、その人物が持っていた揺るがぬ信仰や、神様への深い愛を見て取ることができます。例えば、最初の殉教者となったあのステパノは、死の直前にこのように叫んでいました。使徒 7：60「主よ。この罪を彼らに負わせないでください。」ステパノは自分を憎む者たちから石打ちの刑に遭い、苦しみの真っ只中にありました。今にも死にそうになっていたその中で、彼が口にしたのは、自分を殺そうとしている者たちを主が赦してくださるようという願いでした。彼は最後まで主を見上げ、どんなときも主に対する信頼を失うことはありませんでした。またステパノだけではありません。思い返せば、自分の身に死が間近に迫っていると知っていたパウロは、こんなことばをテモテに伝えます。Ⅱテモテ 4：6-8「6 私は今や注ぎの供え物となります。私が世を去る時はすでに来ました。7 私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。8 今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。」パウロも最後の時が自分に迫っていることをよくわかっていました。しかし彼は同時に、愛する主にこれまで自分が忠実に仕えてきたということ、そしてそんな自分に主が必ず報いてくださるということを確認していたからこそ、このようなことばを大胆に残すことができたのです。パウロの信仰も最後まで揺らぐことはなく、いつも希望に満ちあふれていたのです。また最後にもうひとり、初代教会のポリュカルポスという人物もそうでした。この人物も信仰ゆえに捕えられ、最後には燃え盛る火の中で処刑されていくのです。しかし、そんな彼が自分自身の死を前にしてこのように言っていました。「私は 86 年間キリストに仕えてきましたが、彼は決して私に対して悪いことをしませんでした。どうして、私を救ってくださった私の主を冒瀆することができましようか…」そして最後にこう祈るのです。「それゆえ、あなたの愛する御子、永遠なるイエス・キリストによって、私は全てにおいてあなたを賛美し、ほめたたえ、あがめます。御子と聖霊とともに、栄光が今も、またこの先もあなたにありますように。アーメン。」そして彼は火の中に入れられ、そのまま亡くなっていくのです。ポリュカルポスもほかの二人と同じでした。彼も自分の愛する主がどのようなお方かということをよくわかっていました。だからこそ、最後まで主に信頼し、たとえ目の前に死が迫ることがあったとしても、変わらず心から主に賛美をささげていたのです。私たちがこうして“最後のことば”を見れば、その人物がどんな信仰を持ち、どんなふう歩んだ

のか、その姿をはっきりと見て取ることができます。そして、きょう見る詩篇 18 篇でも同じことが言えるのです。

この詩篇を記したダビデは、まさに自分の人生をここで振り返っていました。どうしてそう言えるのかといえば、ダビデはこんな表題をこの詩篇につけています。18 篇の下を見ていただくと彼はこう言います。「指揮者のために。【主】のしもべダビデによる。【主】が、彼のすべての敵の手、特にサウルの手から彼を救い出された日に、この歌のことばを【主】に歌った。」と。そして興味深いことに、この詩篇 18 篇のことばは実はここだけではなくて、Ⅱサムエル記の中でも見て取ることができるのです。この箇所はダビデの人生が終わりに近づいている時に記されたものだと考えられているのですが、Ⅱサムエル 22:1 こう記されていました。「【主】が、ダビデのすべての敵の手、特にサウルの手から彼を救い出された日に、ダビデはこの歌のことばを【主】に歌った。」と。表題とほぼ同じことばが使われているのです。そして私たちがこの 22 章を見ていけば、詩篇 18 篇とほとんど同じことばが連なっている様子を見て取ることができます。つまり、このダビデの記したことばは、自分の身に死が迫っているその中にあって、彼が自分の人生を振り返りながら記したものだということです。彼の頭の中には、特にサウル王様のことがにあったのかもしれませんが、でも、神様がすべての敵から救い出してくださったことを思い返していました。言うまでもなくダビデの人生を見てみれば、さまざまな敵との戦いがありました。ゴリアテとも戦いました。サウル王様にいのちを狙われることもありました。イスラエルに敵対する国々と争うこともありましたし、自分の息子アブシャロムに身を追われることもありました。彼の人生はたくさんの苦しみや試練にあふれていたのです。

そのような人生を振り返った彼が“残したことば”を一言でいうなら、それは「主に對する感謝」でした。ダビデは良いときも悪いときも、たとえ希望の見えないような暗闇の中にあつたとしても、いつも主を覚え、主に感謝する者として最後まで生きていたのです。

では、私たちはこのダビデと同じように、どんなときも変わらずに感謝する者としてきょうを歩んでいるでしょうか？日々の生活の中にあつて、確かに私たちもさまざまな痛みや悲しみを経験しますが、その中であつて、主をほめたたえる者として歩んでいるでしょうか？それとも、不平不満が口からすぐに出てくるような者でしょうか？私たちの周りには人が私たちを見た時に、私たちを指して、あの人は“感謝する人だ”と見るでしょうか？確実に言えるのは、私たちは感謝するという点において、まだまだ成長しなければいけないということです。私たちがこの詩篇の 18 篇を見るときに、ダビデはそのことについて大切な教えを私たちに伝えてくれています。一体どうしてダビデはどんな状況の中にあつても主に感謝することができたのでしょうか？どんなことを彼は思い起こして主に賛美をささげていたのでしょうか？ダビデはそのことを私たちに教えてくれます。では早速、皆さんと一緒にテキストを見ていきたいと思ひます。

○神様に対するダビデの感謝 1-3 節

まずこの詩篇を通して最初に見ることができるもの、それは「神様に対するダビデの感謝」です。そのことが 1-3 節の中に記されています。彼はこのように始めていました。「:1 彼はこう言った。

【主】、わが力。私は、あなたを慕ひます。:2 【主】はわが巖、わがとりで、わが救い主、身を避けるわが岩、わが神。わが盾、わが救いの角、わがやぐら。:3 ほめたたえられる方、この【主】を呼び求めると、私は、敵から救われる。」ここでダビデは、神様が自分と個人的な関係にあるお方であることを確信していました。彼はただの知識としてではなく、自分にとって神様はどのような存在なのかをよくわかっていました。だからこそ、見ていただければわかるように、彼はこの箇所で 9 回にも渡って「主はわが〇〇」と言い表していました。ダビデは主を見上げた時に言うのです。「【主】あなたこそが自分を弱い時に支えてくださる「力」。【主】あなたこそが自分をどんな攻撃からも守ってくださる「巖」、「とりで」。【主】あなたこそが自分を苦しみから助け出してくださる「救い主」。【主】あなたこそがいつも身を避けることのできる

揺るがぬ「岩」、「神」。**【主】**あなたこそが自分を敵から守り、勝利する力を与えてくださる「盾」であり、「救いの角」であり、「やぐら」であられる」と。彼はそのことを心から信じていました。そして、そのことをダビデはさまざまな戦いや苦しみを経験する中で学んでいました。ダビデは自分の主がどのようなお方なのか、自分にとってどのようなお方なのかをよくわかっていました。だからこそ、彼はそんな神様を心から愛し、この方を慕い求めていました。

1節の最後に出てきた「私は、あなたを慕います。」この「慕います」ということばは、本来、神様から人に対して示されるあわれみや愛というものを示すのに用いられます。しかしダビデは、ここでそのような使い方をしていません。彼は自分自身の神様に対する愛を表すのにこのことばを用いたのです。人から神様に対する愛を表すのにこのことばが用いられているのは、この箇所しかありません。ほかの箇所では、神様から人に対するものを表すのに使われているのです。では、ダビデは一体何を言わんとしたのでしょうか？それは、ダビデの神様に対する愛というものが、とても深く、親密で、熱心なものであるということを強調しようとしたわけです。彼の愛というものは、単に口やうわべだけのものではありませんでした。彼はさまざまな試練を経験したのですが、その中にあっていつも主が自分とともにいてくださるということを覚えていたので、その主に向かって叫ぶのです。「神様、私はあなたのことを心から慕い求めています。あなたが私に示してくださるそのような愛で、私もあなたのことを愛したいのです。」と。

確かにダビデはその人生において、さまざまな苦しみを味わい、大きな悲しみを経験することもありました。絶望的な状況の中に置かれることもありました。しかしその中にあってなお、彼はどんなときも神様が自分に力を与え、守りを与え、救いを与えてくださると信じて疑うことはありませんでした。彼の心はいつも主に向いていたのです。その結果、彼は試練を通して主を深く知り、その知識が彼をますます主を愛する者、主をほめたたる者へと変えていったのです。

このダビデにとって、苦しみは、彼を主から遠ざけるものではありませんでした。彼を主にますます近づけるものだったのです。これは私たちひとりひとりにとっても、とても大切なことです。

考えてみれば 私たちは日々の生活の中でさまざまな困難に直面します。それが仕事や学校のことかもしれないし、家庭にあって子育てのことかもしれないし、健康や人間関係に関わることもかもしれません。私たちは望んでいなくても、人それぞれ色々なもので難しさというものを覚えることがあるのです。問題は、そのような困難の中に私たちが置かれたときに、その中にあってどのように振る舞っているか、ということです。もっと言えば、どんなふうにその状況を捉えているか、ということです。ダビデと同じように苦しみを通して主に信頼することを学び、ますます主に近づけられる者となることを私たちは望んでいるのでしょうか？主を個人的に深く知り主を愛する者として成長する、そんな訓練のときとして苦しみを捉えているのでしょうか？それとも、置かれている状況に対して、神様に怒ったり絶望に明け暮れて、主以外のものに助けを求めたりしないのでしょうか？

ダビデはさまざまな戦いを通して繰り返し、自分のうちには敵に勝利する力など備わっていないことを学びました。自分に十分な助けは主からしか来ないということを学んだのです。そのことを学んでいたからこそ、彼は主を見上げて、「**【主】**こそ「わが力」、**【主】**こそ「わが救い主」あなただけが私を助けてくださるお方」と告白し、この方をほめたたえていました。

私たちはどうでしょうか？苦しみの中にあって、「神様、あなたこそが私をささえてくださる力です。私にはあなただけがが必要です。あなただけで十分です。」とそう告白するのでしょうか？それとも、自分なら大丈夫だ、自分にはこの状況をどうにかすることができると信じ続けているのでしょうか？

思い返せば、パウロも同じようなことを言っていました。彼もたくさんの苦しみや試練を経験しました。貧しさだけではなく、数え切れないほどの悲しみや痛みを味わったのです。そしてそんな彼がこう言います。ピリピ4：11「乏しいからこう言うのではありません。私は、どんな境遇にあっても満ち足りる

ことを学びました。」と。パウロは主の内に満足があるということを一切知らなかったと思いますか？もちろんそうではありません。彼は主の内にこそ満足があるということを絶対に知っていました。でも、さまざまな苦難を経験する中で、それがどういうことを意味するのかを深く学んでいったのです。だからこそ彼は主に信頼しました。主だけが自分に必要なものだとも彼もよくわかっていました。それゆえに彼はその後13節でこう言うのです。「私は、私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできるのです。」と。

ダビデもパウロもさまざまな試練を通して主を個人的に知り、この方をますます愛する者へと変わっていきました。では、私たちはどうでしょう？

さて神様に対する感謝を述べた後で、4節から、ダビデはなぜ自分が主に対して感謝をささげていたのか、具体的な三つの理由を教えてください。

●なぜダビデは感謝をささげたのか？：三つの理由

1) 神様が力強い助けを与えてくださったから 4-19節

ダビデはなぜどんなときも変わらずに感謝したのか？まず一つ目の理由として挙げられるのは、「神様が力強い助けを与えてくださったから」でした。ダビデは主が偉大な力を働かせて自分を助け出してくださいましたということを証しするのです。そのことが4-19節の中に記されています。まず4-6節で彼はこう言います。「:4 死の網は私を取り巻き、滅びの川は、私を恐れさせた。:5 よみの網は私を取り囲み、死のわなは私に立ち向かった。:6 私は苦しみの中に【主】を呼び求め、助けを求めてわが神に叫んだ。主はその宮で私の声を聞かれ、御前に助けを求めた私の叫びは、御耳に届いた。」ダビデはここで、かつて自分の身に死の危険が迫っていたということ、希望の見えない暗闇の中にいたということをお返ししていました。4-5節に出てくる「死の網」「滅びの川」「よみの網」「死のわな」この四つの表現はすべて、彼が深刻な苦悩を抱えていたことを表現しています。ダビデは、「かつて自分は、自分に絡み付く「死の網、よみの網」によって身動きが取れなくなっていた、自分を滅ぼそうとする苦しみが濁流のように押し寄せて来てその中で溺れそうになっていた、助けを求めて周りを見渡そうとも、そこには自分のいのちを奪おうとする危険な「わな」が数多く仕掛けられていたと。また、6節の最初に出てくる「苦しみ」ということばにも、「狭い」とか「窮屈な」とか「端に追いやられる」といった意味があります。想像できますね。彼はまさにひどい苦しみによって取り囲まれ追い詰められていました。どこにも逃げ場がないかのような厳しい状況の中にダビデはあったのです。彼の身には死が迫っていました。

しかしその中であって、彼はどこから助けが来るのかということをおぼろげに覚えていました。だからこそ彼はその6節の中で、「わが神」と自分の愛する主を何よりも求めていたのです。そしてその結果は、6節の最後に書いてありますが、ダビデの叫びを聞かれた主は、彼が必要としていた救いを与えられたのです。ダビデは主が私の声を聞いてくださったと。そして7節以降で、主がどれほど大きな力をもって自分を助け出してくださいましたのかということをおぼろげに表現を用いて描写しています。7-15節を見てください。こんな風に書いていました。「:7 すると、地はゆるぎ、動いた。また、山々の基も震え、揺れた。主がお怒りになったのだ。:8 煙は鼻から立ち上り、その口から出る火はむさぼり食い、炭火は主から燃え上がった。:9 主は、天を押し曲げて降りて来られた。暗やみをその足の下にして。:10 主は、ケルブに乗って飛び、風の翼に乗って飛びかけられた。:11 主はやみを隠れ家として、回りに置かれた。その仮庵は雨雲の暗やみ、濃い雲。:12 御前の輝きから、密雲を突き抜けて来たもの。それは雹と火の炭。:13 【主】は天に雷鳴を響かせ、いと高き方は御声を発せられた。雹、そして火の炭。:14 主は、矢を放って彼らを散らし、すさまじいいなすまで彼らをかき乱された。:15 こうして、水の底が現われ、地の基があらわにされた。【主】よ。あなたのとがめ、あなたの鼻の荒いぶきで。」

ダビデはこの箇所でも、自分を助け出そうとしてくださっている神様の圧倒的な力を、自然界に例えることによって表現しようとしていました。例えば7節にも出てきた、「地を揺るがすほどの地震」や「燃

え上がる煙や火」といったものは、ダビデの敵に対して燃え上がる主の怒りを表わすし、「主がケルブや風の翼に乗って飛びかけられている」というのは、主の助けは自分の元に素早くやって来るということを表すし、「暗やみ」「濃い雲」の中から「雹」や「火の炭」がやってくる、また「雷鳴」や「いなずま」は、主の御声が鳴り響き、さばきが速やかに下るといったことを表しているのです。ダビデは苦しみの中にいました。しかしその中であって、自分を助け出そうとしてくださっている主の力を覚えたときに、彼はそれがどれほど想像を絶する強大なものかということを書き記しているのです。そして彼の説明はこのように16節も続いています。16—18節「:16 主は、いと高き所から御手を伸べて私を捕え、私を大水から引き上げられた。:17 主は私の強い敵と、私を憎む者とから私を救い出された。彼らは私より強かったから。:18 彼らは私のわざわいの日に私に立ち向かった。だが、【主】は私のささえであった。:19 主は私を広い所に連れ出し、私を助け出された。主が私を喜びとされたから。」ダビデは自分の弱さをよくわかっていました。自分を取り囲む敵たちを見たときに、その者たちが自分には絶対手に負えない強い者たちだと認めていました。しかしそんなダビデを、圧倒的な力を持っておられる主が助け出されたのです。ほかのだれでもない主ご自身が手を差し伸べ、彼をその悲しみや恐れの中から引き上げられました。苦しみの中に取り囲まれ、自分の力ではどうすることもできず追い詰められて窮屈になっていたダビデを、主は安全な広いところへと連れ出されたのだと。ダビデはこのことをよく覚えていました。人には決して理解できないほどの力を持った全能の神様が、自分のような者をあわれんでくださり、救いを与えてくださったことを忘れることはありませんでした。だからこそ、この主の助けを思いめぐらすときに、彼の心には神様に対する感謝があったのです。

感謝なことは、きょうの私たちもダビデを助け出された神様にあって、この偉大な神様に信頼して生きていくことができるということです。この世界を創造し、支配しておられる絶対的な力を持った神様が、きょう私たちとともにいてくださるのです。私たちが弱さを覚えるときに力を与え、手に負えない困難にあるときに守りを与え、どんな状況であろうともご自分の意のままに変えることができる、そのような力を持った方がともにいてくださるのです。

もちろんこれは、私たちがこの主に信頼さえすればすべての問題がすぐに解決するということを意味しているわけではありません。ダビデを思い出しても、彼はサウル王に追われて約10年の間、また息子アブシャルムに追われて約3年もの間、彼は逃げていました。彼はその中であってさまざまな危険に遭遇したのです。その中であって悲しみや苦しみを経験しました。「神様、どうしてあなたは偉大な力を持っておられるのに、今すぐ自分を助け出してくださらないのですか。」とそう口にしてもおかしくないなかったかもしれません。でもダビデはそうはしませんでした。たとえ状況が改善しない中であつたとしても、主に変わらず信頼し続けたのです。それは、この方だけが自分に必要な救いの力を持っておられる、と知っていたからでした。彼に必要な助けや救いはこの方からしか来ないとよくわかっていたのです。

私たちも同じです。自分の置かれている状況に変化が見えなかったり、希望を見出すことが不可能に思えるような場面に直面することがあるかもしれません。どうかそのときはこのみことばを思い返してください。私たちのことを私たち以上に知っていてくださり、偉大な力を持って私たちをささえくださる方が私たちときょうともにいてくださいます。この方は自分のものを絶対に見捨てることはないとの約束を私たちに与えてくださったのです。イエス様がこう言われました。マタイ28:20「見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」(cf. ヨハネ10:28; ヘブル13:5) だとすれば皆さん、この方にすべてを委ねることです。そしてダビデのようにこの神様の偉大な力を覚えて、守り覚えて感謝をささげることです。

2) 神様が正しい報いを与えてくださったから 20—29節

なぜ彼が感謝をささげ続けられたのか、二つ目の理由は、「神様が正しい報いを与えてくださったから」でした。ダビデは主が偉大な力を持ったお方であるだけでなく、義に報いてくださる誠実なお方であると証しています。そのことが20-29節の中で見て取ることができます。まず20-24節「:20 【主】は私の義にしたがって私に報い、私の手のきよさにしたがって私に償いをされた。:21 私は【主】の道を守り、私の神に対して悪を行なわなかった。:22 主のすべてのさばきは私の前にあり、主のおきてを私は遠ざけなかった。:23 私は主の前に全く、私の罪から身を守る。:24 【主】は、私の義にしたがって、また、御目の前の私の手のきよさにしたがって私に償いをされた。」これを読んで、ダビデはなんて傲慢な人物なのだと思われた方があるかもしれません。彼の人生を振り返ったときに、彼は姦淫の罪や殺人の罪を犯していたじゃないか、どうして「私は【主】の道を守り、…私の神に対して悪を行なわなかった。」と言うことができたのだらう？と。ダビデはここで自分の正しさを誇りに思い、神様の前に高ぶっていたのでしょうか？もちろんそうではありません。前回、私たちが見た詩篇17篇にも出てきていましたが、彼は別にここで自分が罪のない完璧な人間だと言いたかったのではありませんでした。また、私たちが今まで見てきた詩篇の18篇の文脈を考えても、ダビデはこの詩篇を通して、最初から自分に目を向けるのではなく、自分を救い出してくださったその方のすばらしさに目を向けていました。ですから、このことばは彼のプライドにあふれたものではありません。彼は自分の罪深さをよくわかっていました。

ではダビデはここで一体何を言わんとしたのでしょうか？簡潔に言えば、ダビデは、主が義なる誠実なお方であること、そしてこの方は、ご自分に忠実に歩もうとする者に、その歩みにふさわしい報いを与えてくださると信じていたのです。ダビデはここで、「神様、見てください。私はこんなにも正しいことをしました。」と言おうとしたのではなく、「神様、私はあなたのことを慕い求めています。だからあなたを愛するがゆえに罪を離れ、みことばに忠実に歩もうとしています。どうか、その生き方に目を留めてください。」と、そう訴えたのです。ダビデは決して完璧な人間ではありませんでした。多くの罪を犯し、その結果、主の厳しい懲らしめも経験しました。しかし彼は、心から主の前に罪を悔い改めて、主のみこころにかなう歩みを追い求め続けていたのです。そして、そのように歩んでいる自分に対して主が正しく報いてくださると信頼していました。だから続き25-29節を見ていただくと、彼は主のご性質に対してこのような説明を加えていました。「:25 あなたは、恵み深い者には、恵み深く、全き者には、全くあられ、:26 きよい者には、きよく、曲がった者には、ねじ曲げる方。:27 あなたは、悩む民をこそ救われますが、高ぶる目には低くされます。:28 あなたは私のともしびをともし、【主】、私の神は、私のやみを照らされます。:29 あなたによって私は軍勢に襲いかかり、私の神によって私は城壁を飛び越えます。」25節に出てきた「恵み深い者」ということばには、「誠実さ」や「主の契約やおきてに沿って忠実に歩む者」といった意味が含まれています。つまりダビデはこう言うのです。「神様、あなたは忠実に歩む者には忠実に答えてくださるそのようなお方です。きよく正しく歩む者にはその正しさを示してくださるそのようなお方です。私はそのようなあなたの前を今、忠実に歩もうとしています。だからこんな私を顧みて、敵の手から救い出してください。」と。どうなったのでしょうか？主は、そんな彼を助け出されたのです。だからこそ、ダビデはそのことを思い出して、主に感謝していました。彼の正しさが彼を苦しみから救ったわけではありません。主の前を正しく歩む者には必ず報いてくださるという主のご性質が、彼を救い、彼の心に喜びや希望を与えていたのです。ダビデは主がどんなお方なのか、主は正しい者には正しく報いてくださるお方なのだとよくわかっていました。

そして皆さん、私たちもきょう同じ主を見上げて歩むことができます。私たちの主はどのようなことがあったとしても、正しく報いてくださるお方だと確信を持って生きていくことができるのです。考えてみてください。どうしてステパノやパウロといったあのような人物たちは、ひどい苦しみを経験しようとも、たとえ死が間近に迫ったとしても、最後まで信仰を守り通すことができたのでしょうか？

どうして彼らは、置かれた境遇を嘆いたり、神様に怒りを表したりするのではなく、揺るがぬ信仰を持つことができたのでしょうか？それは、自分たちの歩みに神様がふさわしい報いを与えてくださると信じていたからです。周りの者が何を言おうとも、主が正しく報いてくださると信じていたのです。彼らは天で自分たちを待っているものがどれほど素晴らしいものかをよくわかっていました。そして、それを見上げて、揺るがぬ希望を持っていたからこそ、最後まで主に忠実に歩み続けたのです。その希望が、キリストに似た者になり続けたいという彼らの思いの、歩みの原動力となっていました。

そうであるなら、私たちはこの主の前を日々どのように歩んでいるのでしょうか？この主の目をいつも覚えた歩みをしているのでしょうか？私の主は私に正しく報いてくださる方だと、そのように覚えて歩んでいるのでしょうか？それとも、この世にあるはかない楽しみに心が奪われたり、主のみことばに従うことよりもほかのものに喜びを見出したりしていないのでしょうか？いやそもそも、この主を愛して従っていくことよりも、自分の思いのままに生きることを第一にしていないのでしょうか？

もし、そんな人がこの中におられるなら、ダビデがきょう言っていたことばをよく聞いてください。彼ははっきりとこう言っていました。26節の最後で、「この神様は「曲がった者には、ねじ曲げる方。」だ」と。言い換えれば、「主に逆らい、主の忌み嫌われることを行っている者には、それにふさわしい報いとして厳しいさばきを与える」ということです。ひとりひとりを主が正しく報いられるその日が必ずやって来ます。それぞれの行いに対して主が正しく報いる日がやって来るのです。その時にいくら自分の歩みが間違っていたと後悔したとしても、自分たちの生き方が主の前に間違っていたとそう悲しんだとしても、その時にはもう遅いのです。ですから、もしこの中にまだ主に逆らって今を生きている人がおられるなら、どうかきょう自分の罪を悔い改めて、この主のために生きる歩みを始めてください。救い主イエス・キリストが十字架に架ってくださったということ、その成し遂げてくださった救いを自分のものとして受け入れてください。この主をきょう自分のものとして、この方のために生きる生き方を始めてください。

主を愛して主の前に忠実に歩もうとされている皆さん、わたしたちは偉大な力を持った主がともにいてくださり、この方が私たちの歩みに正しく報いてくださるといふ希望を今持っています。そうだとするのなら、たとえどんな状況に置かれることがあったとしても、この主を覚え続けることです。周りの者が何を言おうとも、イエス・キリストから離れるようにと言おうとも、この世の一時的な満足に目を向けるのではなくて、自分のために用意されている義の栄冠を目指して、パウロのように走り続けることです。感謝を持って、最後まで走り続けることです。

3) 神様が勝利する力を与えてくださったから 30-45節

そして最後、なぜダビデが喜べたのか三つ目の理由は、「神様が勝利する力を与えてくださったから」でした。ダビデはそのことを30-36節で記しています。「:30 神、その道は完全。【主】のみことばは純粋。主はすべて彼に身を避ける者の盾。:31 まことに、【主】のほかにはだれが神であろうか。私たちの神を除いて、だれが岩であろうか。:32 この神こそ、私に力を帯びさせて私の道を完全にされる。:33 彼は私の足を雌鹿のようにし、私を高い所に立たせてくださる。:34 戦いのために私の手を鍛え、私の腕を青銅の弓をも引けるようにされる。:35 こうしてあなたは、御救いの盾を私に下さいました。あなたの右の手は私をささえ、あなたの謙遜は、私を大きくされます。:36 あなたは私を大またで歩かせます。私のくるぶしはよろけませんでした。」ダビデは自分の主がどれほど素晴らしいお方なのかを、さまざまな苦しみや戦いを通して実際に体験しました。そして主こそが、戦いに勝利するために必要な力であるということ、その力を備えてくださるお方であるということ深く学んだのです。だからこそ、彼はここでも自分自身に目を向けるのではなくて、主に焦点を置いてこのように繰り返していました。彼は主を指して言うのです。「あなたこそが「私に力を帯びさせ、私の道を完全に」してくださるお方、あなたこそが「私の足を雌鹿のようにし、私を高いところに立たせて」くださるお方、あなたこそが「私の手を鍛え、私の腕を青銅の弓をも引けるようにさ

れる」お方なのだ」と。ダビデは自分の内に力や知恵があるとはまった全く思っていませんでした。彼はただ、「力あるその主の「右の手」が自分を「ささえ」てくださるからこそ、主があわれみを示して自分を強めてくださるからこそ、揺るがされることはないのだ」と告白していたのです。間違いなく彼にとってこの神様こそすべてでした。この方の内にも、自分の必要なものがあるのだと彼は確信していました。だからこそ、彼はこのように主をほめたたえたのです。31節に「:31 まことに、【主】のほかはだれが神であろうか。私たちの神を除いて、だれが岩であろうか。」と。これが彼の持っていた信仰でした。そしてこの主に信頼し力を得ていたからこそ、彼は敵に対して勝利することもできたのです。そのことが37—45節にこう記されています。「:37 私は、敵を追って、これに追いつき、絶ち滅ぼすまでは引き返しませんでした。:38 私が彼らを打ち砕いたため、彼らは立つことができず、私の足もとに倒れました。:39 あなたは、戦いのために、私に力を帯びさせ、私に立ち向かう者を私のもとにひれ伏させました。:40 また、敵が私に背を見せるようにされたので、私は私を憎む者を滅ぼしました。:41 彼らが叫んでも、救う者はなかった。【主】に叫んでも、答えはなかった。:42 私は、彼らを風の前のちりのように、打ち砕き、道のどろのように除き去った。:43 あなたは、民の争いから、私を助け出し、私を国々のかしらに任せられました。私の知らなかった民が私に仕えます。:44 彼らは、耳で聞くとすぐ、私の言うことを聞き入れます。外国人らは、私におもねります。:45 外国人らはしなえて、彼らのとりでから震えて出て来ます。」と。ここでの大切なポイントはこういうことです。ダビデは、主に敵対して逆らうさまざまな敵と戦い、勝利を収めていました。また彼は国々を収める王にもなりました。しかしそれらすべてを可能にしたのは、彼自身の力ではなく、神様だったということです。彼は自分が敵を倒したと、誇らしげに自慢したのではありません。彼は自分の弱さをよく知っていたのです。だからこそ、戦いに勝利したことを振り返って言うのです。「神様、私ではなく、あなたが私に力を帯びさせてくださったからこそ、私に立ち向かう者を私のもとにひれ伏させてくださったからこそ勝利できたのです。あなたが私を助け出し、私を国々のかしらに任じてくださったのです。あなたがすべてを成し遂げられました。ほめたたえられるべきなのはあなただけです。」と。

この詩篇を通してダビデがしたかったことはただひとつ、「主をほめたたえる」ことでした。彼は自分に目を向けて、自分の功績や権力を誇りにしようとは一切思っていませんでした。だからこそこの詩篇を見れば、繰り返し自分のことを指すのではなくて、神様のことを、「彼」、「あなたが」と繰り返ししていたのです。彼は自分に目を向けていません。それは彼の人生のすべてが主によってささえられているとよくわかっていたからでした。ダビデは良いときも悪いときもそこにいつも変わらずに神様が自分とともにいてくださる、この方が守り導いてくださるということを覚えていたのです。だからこそ、ダビデは最後にこのように18篇をまとめていました。46—49節を見ていただくと「:46 【主】は生きておられる。ほむべきかな。わが岩。あがむべきかな。わが救いの神。:47 この神は私のために、復讐する方。神は諸国の民を私のもとに従わせてくださる。:48 神は、私の敵から私を助け出される方。まことに、あなたは私に立ち向かう者から私を引き上げ、暴虐の者から私を救い出されます。:49 それゆえ、【主】よ。私は、国々の中であなたをほめたたえ、あなたの御名を、ほめ歌います。」ダビデが口にしたことは最初から変わっていませんでした。彼は主をほめたたえていたのです。彼はこれまで語ってきたことをまとめて言います。46節の初めに、「私の「【主】は生きておられる。」」と。彼はそのことを目の当たりにしたのです。神様が偉大な力を持って自分を敵の手から救い出してくださったということ、正しく自分に報いてくださったということ、そして自分に必要な力や守りというものを与えてくださったということ、それらを実際に味わったからこそ、主に対する信頼はますます確固たるものになりました。私の主は生きておられる、私に必要な救いを与えてくださるこの方は生きておられるのだと。なんとすばらしいことだ、なんと感謝なことだと御名をほめたたえていたのです。ダビデは、主が自分をあわれんで救いを与

えてくださったことを心から感謝していました。しかし同時に、主がどんなときも変わることはない誠実なお方であるからこそ、そのことを学んだからこそこのように続けるのです。

最後に彼は、かつて自分がこの誠実な主と結んだ約束に思いを巡らしてこの詩篇を終えています。50節に書いていました。「:50 主は、王に救いを増し加え、油そそがれた者、ダビデとそのすえに、とこしえに恵みを施されます。」確かにダビデはこの時、さまざまな敵から救い出されたということを楽しんでいました。しかしそれ以上に、誠実な神様が、自分と結ばれたあのダビデの契約を必ず守って、永遠の王となる方、偉大な救い主となる方を自分の子孫から起こしてくださるということに確信を置いていたのです。残念ながら、ダビデ自身がその約束の成就を目にすることはありませんでした。でも今の私たちはそれが成し遂げられたということをよくわかっています。救い主イエス・キリストが来られた、ということ私達は皆よく知っています。この方は約束された救い主として地上に来られて、本来私たちが受けるべきその罪の罰を代わりに受け、十字架の上で死んでくださいました。罪の一切ない神の御子が私たちのためにその血を流してくださったのです。しかしそれで終わりではありませんでした。彼は死んでそのままではなく、死に勝利して三日目に墓からよみがえられました。この方はだれにもできなかったその救いを成し遂げて、この方を信じる者には永遠のいのちを与えてくださるとの約束を与えてくださったのです。

皆さん、どうして私たちが苦難の中にあって、希望が見えないような中であって変わらない喜びを見出すことができるのか？それは私たちがこの主イエス・キリストを覚えるときに、確かに私の神は約束を守られるお方だと確信を持つことができるからです。私たちはときに苦しみの中にあって、その苦しみが長引けば長引くほど先が見えなくなり、神様は本当に自分のことを守ってくださるのだろうか、私のことを愛してくださっているのだろうかと思悩むことがあるかもしれません。そんなときは思い起こすことです。私たちに示された神様の愛というものは決して変わらない、私たちの神様は決して変わらないということ。そしてあの十字架を見ると、私たちの最高の愛はもうすでに示されたのだということ。自分の感情や周りの状況によって心を左右されるのではなく、この主の十字架にいつも心を留め続けることです。私たちの主がどのようなお方を覚え続けることです。この方は必ず約束を守られます。約束を守ってイエス・キリストはこの地上に来てくださり、私たちに救いを与えてくださいました。この主を覚え続けることです。ダビデが自分の歩みを振り返ったときに、そこにはっきりと神の姿が見られることを覚えていました。だからこそこの方に感謝をささげたのです。「まことに、

【主】のほかにだれが神であろうか。この方こそ、私にとって救い主なのだ。【主】は生きておられる。」それがダビデの持ち続けた揺るがぬ信仰でした。

では、私たちはどうでしょう？皆さん、私たちはどんな主を覚えて、この方にふさわしい感謝をささげる者として生きているのでしょうか？

〇まとめ

さて今朝、皆さんに一つの質問を考えてもらいました。「もし、自分の死が間近に迫っていると知り、最後に何かことばを残すとしたら、どんなことばを残しますか？」皆さんはどのように答えるでしょうか？かつての信仰者たち、ステパノもパウロもポリュカルポスも、そしてこのダビデも、良いときも悪いときも、たとえ苦しみ死が間近に迫っているそんなときも、その信仰は決して揺るぐことはありませんでした。それは彼らが、自分たちが従っているその神様がどのようなお方を、歩みを通して、さまざまな苦しみを通して深く学び、よく分かっていたからでした。

感謝なことに、きょう私たちは彼らと同じ主に信頼して生きていくことができます。私たちはどのような状況に置かれたとしても、決して変わらないこの方に目を向けて生きていくことができます。ダビデに力強い助けを与えられたそのお方が、ダビデに正しく報いを与えられたそのお方が、ダビデに勝利する力を与えられたそのお方が、きょう私たちとともにいてくださると確信することができます。たと

えどんなことが起こったとしても、私たちは、この方のうちに、平安を、守りを、喜びを、慰めを見出すことができるとそう確信することができます。なぜなら、この方は誠実で、約束を守られたからです。

そして何より、私たちは、一度、救い主として来られたこのイエス・キリストが、再び、王として帰って来られるとの揺るがぬ希望を持つことができます。それは、この方が変わらないお方だからです。そうだとすれば皆さん、私たちにふさわしい応答はどのようなものでしょうか？どんな信仰を最後まで持ち続けるでしょうか？どんなときも主に目を向けることです。この方の用意してくださっている冠を目指して、ともにこの方に感謝と賛美をささげる者として成長していきましょう。